

《研究報告》

ポスト新自由主義期におけるイスラーム的相互扶助の再構築： ザカート・ワクフ複合、タカーフルの人間観、福祉の倫理的ガバナンス

ハシヤン・アンマール *

Reconstructing Islamic Mutual Assistance in the Post-Neoliberal Era:

The Zakat-Waqf Complex, the Human View of Takāful, and the Ethical
Governance of Welfare

Ammar KHASHAN

This report presents the main findings of the author's research in recent years on new developments in mutual assistance in Asian Muslim societies. Since the 1990s, the neoliberal turn in economic policy has weakened public welfare in many Muslim-majority countries of Asia, and the revitalization of traditional Islamic welfare institutions has been pursued as a response, in what may be read as a search for an alternative path of development. The author has examined this process by combining classical Arabic legal sources with fieldwork in Southeast Asia, South Asia, and West Asia. Three findings frame this report. The first concerns the relations among institutions. *Zakat* (obligatory almsgiving), *sadaqa* (voluntary donation), *waqf* (endowment), and *infaq* (meaningful expenditure) have conventionally been studied as separate institutions, yet in contemporary practice they function as a single complex of socially meaningful resource distribution, which the author terms the ZaSaWaI complex. *Takāful* (mutual assistance) is best understood not as Islamic insurance but as a compound principle of action joining self-help to concern for others. The second finding concerns law and history. The welfare role of waqf rests on a far sparser scriptural basis than zakat and was developed through juristic interpretation (*ijtihād*). Reading this asymmetry through the theory of institutions (*nuzum*) clarifies both the historical adaptability of Islamic welfare and its present openness to redesign. The third finding concerns the ethical basis of trust. These institutions have depended on

* 立命館大学立命館アジア・日本研究機構 准教授
ammar@fc.ritsumeai.ac.jp

contractual fidelity (*wafā'*), trusteeship (*amāna*), and accountability, a basis now being rebuilt under the digital governance of welfare, from zakat platforms in Indonesia to blockchain-based endowments. This report also reviews the international colloquium series and the network of Asian researchers developed through this research, and sets the direction for the next stage of inquiry, an ethics-centered account of social welfare organized around the moral infrastructure that welfare governance will require in the age of artificial intelligence.

キーワード：イスラーム経済、タカーフル（相互扶助）、ザカート（喜捨）、ワクフ（寄進財産）、ポスト新自由主義、人間の安全保障、社会福祉、グローバル・エシックス、デジタル・ガバナンス、モラル・インフラストラクチャー、イスラーム地域研究

Keywords: Islamic economics, takāful (mutual assistance), zakat, waqf, post-neoliberalism, human security, social welfare, global ethics, digital governance, moral infrastructure, Islamic area studies

I. ポスト新自由主義期の福祉後退と相互扶助への問い

アジアのイスラーム圏諸国は、かつてナショナリズムと近代化を掲げて国造りをおこなってきたが、1990年代以降、グローバル化と国際的な新自由主義の影響を受けた経済発展路線に舵を切った。市場の論理が浸透して経済成長が実現される一方で、社会的格差の拡大や公的福祉の後退という弊害も各国で顕在化した。近年、この空隙を埋める動きとして注目されているのが、おりしも半世紀にわたって成長を遂げてきたイスラーム経済を活用し、非政府部門において福祉の諸制度を活用・強化しようとする動きである。その中心には、「タカーフル（相互扶助）」と呼ばれるイスラーム型の相互扶助の概念がある。福祉国家の後退を国家でも市場でもない領域で補おうとするこの動向は、ポスト新自由主義期に固有の現象であり、また、代替的な発展経路としてのイスラーム経済の模索としても理解されるべきものであろう。筆者は過去5年間、この動向を主題とする研究を、アジア諸国の研究者との共同のもとで進めてきた。その途中経過については本誌上でも部分的に報告してきたが（ハシャン 2024）、本稿では、この間の研究をとおして得られた知見の全体像と、そこから開かれてきた新しい研究の地平を示すこととしたい。

もっとも、公的福祉の後退という事態そのものは、イスラーム圏に固有のものではない。高齢化と財政の制約、貧困と格差の再拡大、災害や感染症の頻発は、国家による保護だけでは個人の生を支えきれないという現実を、世界の多くの社会に突きつけている。国際社会はこの課題を「人間の安全保障」の概念のもとで論じてきたが、とりわけ日本は、緒方貞子とアマルティア・センが共同議長を務めた委員会の設置を主導するなど、その国際的な展開を支えてきた（Commission on Human Security 2003）。国家の保護が届きにくいところで、人びとの支え合いは個人の生をどこまで守りうるのか。それは日本自身の共助をめぐる議論とも地続きの、国際社会に共通する問いである。本研究が扱ってきたのは、この大きな問いの一つの部分、すなわちムスリム社会が歴史のなかで育て、いま再構築しつつある非国家的な相互扶助の制度と、その倫理的基盤である。

研究史の中での位置づけを確認しておく。イスラーム固有の経済システムを考察するイスラーム経済論は1950年代に始まるが、現実の経済的な重みを持つようになったのは、1975年のドバイ・イスラーム銀行の設立以降である。それゆえ研究の主流も長らく、リバー（利子）などイスラーム法の禁止事項を回避する金融商品の設計と分析、すなわち金融部門に置かれてきた（Siddiqi 2004; Hassan and Lewis 2007; 長岡 2011; 吉田 2017）。これに対して20世紀末からは、ザカート（喜捨）やワクフ（寄進財産）といった伝統的な福祉の諸制度にもっと目を向けるべきだとする立場が現れ、個別制度についての研究は着実に蓄積されてきた（Salim 2008; Ali et al. 2019）。しかし、筆者の見るところ、そこには一つの偏りが残されていた。イスラーム金融については、リバー禁止の背後にリスク負担の平等性や不労所得の否定、投資の奨励といった一般原理が働いていることが解明されてきたのに対し、福祉の側は「貧者・弱者の救済」という当為の水準で説明されるにとどまり、諸制度を貫くマクロな経済的理念は摘出されてこなかったのである。それでは、いま各国で進んでいる伝統的福祉制度の再活性化は、いかなる理念に支えられ、いかなる実態を持つものなのか。ムスリム社会は伝統的な理念と制度をどのように再解釈して、現代に適合的な相互扶助を構築しつつあるのか。これが、この5年間の本研究プロジェクトを貫いてきた問いである。

この問いに答えるために、これまで、アラビア語の法学史料を中心とする原典研究と、東南アジア・南アジア・西アジアでのフィールドワークにもとづく事例研究とを結合させ、歴史と現代を通底させる方法をとってきた。ワクフ制度に焦点を当てていた研究段階についてはすでにハシャン（2020）で報告したが、その後、考察の対象はワクフからザカートやインファーク（有意の支出）を含むイスラーム的福祉の全体へと広がっていった。この展開は、歴史学・イスラーム法学・地域研究それぞれの専門家との共同研究、およびアジア諸国の研究者との協働のネットワークにより支えられたものである。

II. ザカート・ワクフ複合（ザサワイ複合）とタカーフルの人間観

本研究の理念面での中核をなす知見は、フィールドでの観察から得られたものである。イスラーム的な福祉を担う経済制度としては、ザカート、サダカ（寄付）、ワクフ、インファークが挙げられ、研究史においてこれらは別々の制度として個別に論じられてきた。ところが、東南アジアでの調査を進めると、実践の現場では、これらの境界が流動化していることに気づいた。インドネシアでは、ワクフがインファークやザカートと一体的に運用され、募金プラットフォーム上で寄付者が諸制度を選び分けるというより、むしろ一つの「社会的に有意義な支出」の選択肢群として提示されている場面が少なくない。

この観察をめぐってアジア各国の研究者と討議を重ねるなかで、筆者は、これら四つの制度が相互に補完し合う一つの複合として機能しているという仮説に至り、各制度の頭文字をとってこれを「ザサワイ（ZaSaWal）複合」と名づけた。すなわち、資源を社会的に有意義な形で分配・利用するための、複数の入口を持つ単一の仕組みとしてとらえるのである。これら四制度をまとめて指す呼称としては、インドネシアやマレーシアの実務・研究の文脈で「ズイスワフ（ZISWAF）」の語も用いられている。ただしそれは主として実務上の制度の一覧を指すのに対し、本研究の「ザサワイ複合」は、それらを一つの機能的な複合としてとらえ、ヌズム（イスラーム制度）論の枠組みのなかに位置づけようとする点に力点がある。この仮説には、その後、地域間比較と原典研究の双方から検証を加え、成果の一部を編著（Khashan 2024a）に収めた。

ザサワイ複合が一つの仕組みであるとすれば、それを内側から貫く原理は何か。筆者はそれを「タカーフル」に見いだしている。ここでいうタカーフルは、イスラーム保険のカテゴリーとして流通している狭義の用語ではなく、行動原理としてのタカーフルである。

ここで注目したいのは、この原理が「自助」と「利他」という、通常は対立的に語られる二つの契機を複合させていることである。イスラームの人間観においては、人間のあらゆる行為が来世において神の評価を受けること、すなわち神が人間の行為の最終的な審判をおこなうことが、自明の前提となっている。この前提のもとでは、他者への支出は自己の来世的な利益と結びついており、また、自己の営みも共同体への責任を離れては成立しない。つまり人間は、自と他の両面を合わせ持つ共同的な主体として構想されており、自立性と相互依存性とが同じ一つの行為の中で成立する。ザサワイ複合が制度の面での知見だとすれば、自助・利他の複合的行動原理としてのタカーフルは、その根底にある人間観にかかわる知見だといえる。筆者はこの論点を、ヌズム論の視角と合わせて国際コロキウムで提起した (Khashan 2024b)。なお、日本語圏には、人と人との間柄とそこに成り立つ信頼から倫理を説き起こした和辻哲郎の伝統があり (和辻 2007)、近年は「利他」をめぐる議論も活況を呈している (伊藤 2021)。これらとイスラームのタカーフルとの比較検討は、稿を改めて本格的に論じることとしたい。

制度の側に立ち返ると、ザサワイ複合の内部には重要な非対称性がある。ザカートが聖典クルアーンとスンナ (預言者慣行) に豊富な典拠を持ち、供出義務・課税対象・分配先にいたるまで規定が細かく定まっているのに対して、ワクフの典拠はきわめて限られている。しかもワクフに関する膨大な法規定の大半は、所有権の「停止」によって財をいかに管理・運用するかという手段の側に集中しており、福祉という目的の側の典拠は乏しい。ここから、ワクフの福祉機能が典拠から直接に導かれたものではなく、法学者たちの法解釈 (イジュティハード) の積み重ねによって構築されたものであることが確認される (Khashan 2022)。この構築の過程を法学派ごとに比較すると、ハナフィー法学派の祖アブー・ハニーファのワクフ論から抽出される所有権論がシャーフイー法学派のそれと鋭く対立し、後代のハナフィー派がシャーフイー派の立場に接近していくという興味深い展開も浮かびあがる。筆者は、この伝統的な所有権論を現代的に読み直す枠組として、ムハンマド・バーキル・サドルが提起した「ウンマ (公的) 所有・国家所有・私有」の3区分 (サドル 1993) が有効であると考えており、両法学派の史料分析とあわせて考察を進めてきた。

この非対称性を読み解く理論的な視座が、アブドゥルアズィーズ・ドゥーリー以来の「ヌズム論」である (al-Dūrī 1950)。ヌズム論は、イスラーム的諸制度を歴史的に構築されたものとしてとらえ、法の典拠と実際の法規定の展開を、それを取り巻く社会・経済的環境と結びつけて理解する方法論である。典拠が豊富で歴史的変遷の少ないザカートは、この方法論には必ずしもなじまない。これに対してワクフは、時代ごとの社会・経済的要請に応じて展開と変遷を重ねてきた制度であり、ヌズム論による解析にもっともよく適合する。マムルーク朝期のワクフをめぐる共同研究者・五十嵐大介氏の歴史研究 (五十嵐 2011; Igarashi 2019) が示す制度運用の多様性は、この見立てを歴史の側から裏づけるものであった。そして、まさにこの「解釈によって構築された」という性格こそが、ワクフをはじめとするイスラーム的福祉の歴史的な適応力の源泉であった。そしてこの性格は、後述するように、デジタル化時代における制度の再設計をも可能にしている。ザサワイ複合とタカーフルの人間観という理念面の知見は、こうして、所有権を用益の権利としてとらえる視角やイスラーム的利得論の再検討という、より大きな理論的課題へと接続していくのであるが、その本格的な展開は今後の課題である。

III. 信頼・ワファー・アカウントビリティ： イスラーム社会的金融の倫理的基盤とデジタル・ガバナンス

ザサワイ複合とタカーフルの人間観が本研究の理念面での知見であるとするれば、次に問われるべきは、この相互扶助を実際に成り立たせてきたものは何か、である。ザカートにせよワクフにせよ、自らの財産の一部を福祉的な目的のために手放す行為であり、その運用が信頼に足るものであってこそ初めて成立する。従来のイスラーム学では、この信頼は「神からの報奨」への信頼という神学的な次元で語られることが多かった。しかし制度論の観点からは、運用の実務を担う人間への信頼がいかにして確保されてきたのか、という問いこそが核心となる。それは、イスラーム研究の枠を超えていえば、エシックスを軸に据えた社会福祉論を構想する試みでもある。筆者はこの問いを「互助の信頼学」と名づけ、学術変革領域研究「イスラーム信頼学」（領域代表：黒木英充。黒木・後藤 2023 を参照）の公募研究に参画する形で、本研究と並行して考察を進めてきた。

出発点となったのは、ことばの次元である。聖典クルアーンは「信仰する者たちよ、諸々の契約を履行せよ」（食卓〔5〕章1節）と命じ、契約（アクト）の誠実な履行、すなわちワファーを信仰者の義務として位置づける。筆者は、アクト、アマーナ（信託）、ワファーという相互に関連する概念群の語源と用法を分析し、これらが市場と社会における「信頼形成」の価値的基盤をなしてきたことを論じた（ハシャン 2023a, 2023b; Khashan 2024c）。約束や契約に忠実であることは、単なる個人の徳目ではなく、見知らぬ者どうしの取引と協働を可能にする社会的な資本として、イスラームの経済倫理の中心に据えられているのである。

重要なのは、この倫理が説教の水準にとどまらず、制度の中に埋め込まれてきたことである。ここでも、ザカートとワクフの対比が示唆的である。ザカートは供出が宗教的義務であるため、信頼醸成の焦点は徴収・分配を担う機関の責任と透明性に置かれてきた。これに対してワクフは任意の寄進であり、しかも寄進者の意図がその死後も永続的に実現されなければならない。それゆえ法学者たちは、管財人（ナーズィル）の権限と義務、財の運用と会計をめぐる、きわめて厳密な法規定を発展させた。市場監督官（ムフタシブ）によるヒスバ（監察）の制度もこれに連なる。つまり、契約の誠実履行という規範、受託者の忠実義務、そして運用者に対する監督と説明責任という複数の層が積み重なって、相互扶助の信頼性を制度的に支えてきたのである。イスラーム経済におけるアカウントビリティの問題系は近年あらためて注目されており（Yasuda 2025）、また信頼は紛争が生じた際の解決の仕組みによっても支えられるという論点（Kawamura 2020）を含めて、この倫理的基盤の解明は今後さらに重要性を増すと考えられる。

ザカートやワクフといった伝統的福祉制度の現代における再活性化は、まさにこの信頼の構造がデジタル技術によって組み替えられつつある局面で進行している。インドネシアでは、国家ザカート庁（BAZNAS）が電子決済サービス GoPay と連携してザカートのオンライン納付を広げ、また BNI シャリーア銀行が 2017 年に開設したクラウドファンディング型のプラットフォーム「ハサナ・ワクフ」のように、少額の寄進を広く集める仕組みが定着してきた。ブロックチェーン技術を寄進財の追跡に用いる試みも各地で始まっている。インドネシアのザカートのデジタル化については共同研究者・足立真理氏の一連の研究があり（Adachi 2018）、筆者自身も 2023 年 2 月の国際コロキウムで“Islamic Welfare Activities in the Era of Digital Transformation”と題するセッションを主宰して、インドネシア、

マレーシア、トルコなどの事例を比較検討した。

そこから見えてきたのは、デジタル化を、伝統的な福祉を単に「便利にする」ものと理解してはならない、ということである。取引の追跡可能性や即時の報告は、たしかに透明性と説明責任を強化しうる。しかし同時に、対面の人間関係に埋め込まれていた信頼が匿名的なシステムへの信頼に置き換わるとき、そこで失われるものは何か、という問いも避けられない。制度・倫理・デジタル化を貫くこの一連の考察は、研究期間の集大成となる単著（Khashan 2026a）において本格的に展開した。同書は2026年3月に刊行されたものである。そこでは、初期の法学的典拠から現代のデジタル的実践までを一つの問題系としてたどり、ザカートとワクフを、社会的責任を安定させる二つの様式として読み解いたうえで、それらを支える制度の総体を「相互責任のアーキテクチャ（architecture of mutual responsibility）」として提示した。そこで一貫して問われているのは、技術がもたらす利便性や可視性のもとで、責任がその道徳的な内実を失わずにいかに保たれうるか、という点にほかならない（Khashan 2026a: p. x）。本稿で示してきた倫理的基盤の分析は、当書の中核をなすものである。

そして今、この問いはいっそう切実なものとなりつつある。受給資格の判定や配分の優先順位づけにアルゴリズムが関与し始めるとき、人と人との対面の関係が見えにくくなった福祉の統治のなかで、信頼と説明責任を支えるものは何か。この問いへの応答は、次節で述べる今後の研究の中心的な課題となる。

IV. 共同研究の展開と今後の課題：コロキウムからモラル・インフラストラクチャーへ

以上の考察は、国際的な共同研究の中で鍛えられてきたものである。その中軸となったのが、立命館大学アジア・日本研究所を拠点として毎年度開催してきた国際コロキウム「アジアの文明と発展の道（Asian Paths of Civilization and Development）」である。2022年度から2025年度まで毎年度1回、東南アジア・南アジア・西アジアの研究者を交えて、ザカート・ワクフ・タカーフルからイスラーム社会的金融にいたる本研究の中心主題を継続的に取り上げてきた。とくに2025年度の第7回は「新自由主義以後のイスラーム経済」を主題に掲げ、タカーフルとイスラーム社会的金融の接合を正面から論じた。各回の成果については、同名の論集として刊行すべく、現在編集と査読を進めている。当初ワクフ研究を軸としていた研究者ネットワークがイスラーム福祉の全体へと対象を広げてきた経緯、およびコロナ禍がもたらした制約とオンライン化によるその克服についてはハシャン（2024）で述べたとおりである。クウェートでの現地調査など持ち越された課題も残るが、同地における現代のワクフ再興の諸相については、すでに文献にもとづく理論的な考察を試みた（Khashan 2020）。

本研究が摘出した「自立性と相互依存性」をともに重んじる人間観は、イスラーム経済を代替的な発展経路としてとらえ、ポスト資本主義の経済システムを構想する近年の議論（Nagaoka 2022, 2025）とも響き合うものである。さらに筆者は、この知見をイスラーム研究の内側にとどめず、より広い倫理的な議論へ接続する作業を始めている。経済と倫理の再接合は、発展を自由の拡大としてとらえ直したアマルティア・センの議論（Sen 1999）以来、開発論の中心的な課題であり続けてきた。気候変動と格差の時代に、金融を倫理的な目的に沿わせようとする「倫理的金融（ethical finance）」の議論が国際的に高まっているが、そこには一つの逆説がある。基準は増殖し ESG 資産は拡大する一方で、グリーンウォッシングへの疑念はかえって深まっている。倫理的な基準が、金融の構造そのものを変えないまま上乘せされているにすぎないのではないか、という疑念である。

筆者はこの問題状況に対して、イスラーム経済思想史の側から応答する英文論考を国際的な編著において刊行予定である（Khashan forthcoming）。そこで論じたのは、この伝統が倫理的金融の議論に提供しうる最大のものは、倫理が制度構造として作動してきた歴史的経験の記録である、ということである。イブン・ハルドゥーン（1406 年没）の『歴史序説』においては、公正、稼得、価格、徴税、商業の倫理が、文明（ウムラーン）の中で一つの因果の連関をなしており、「不正は文明を滅ぼす」という命題は道徳的な説教としてではなく、努力がその主体に還るという期待を破壊する経済的メカニズムとして提示されている（Ibn Khaldūn, *Dīwān al-Mubtada' wa-l-Khabar*, vol. 1: 353–354）。他方、現代イスラーム経済学を代表する M・ウマル・チャプラの主要著作を四半世紀にわたって通観すると、その倫理的構想が分析的な力を獲得したのは、まさにこのハルドゥーン的な洞察、すなわち価値が経済に作用するためには制度の動態を必要とするという洞察を回復した地点においてであった。この系譜の発見は、本研究の知見を普遍的な議論へ開くための鍵となっている。

その論考で筆者が導入した概念が、「モラル・インフラストラクチャー（moral infrastructure）」である。その内実は、契約の誠実履行（ワファール）や信託（アマーナ）の規範から、強制力をともなう市場の監督（ヒスバ）、災禍の責任を分かち合うアーキラ（集団的責任分担の制度）、さらには社会的に限定された用益としての所有の構想にまでおよぶ。こうした倫理規範とその制度的な担い手との積層こそが、経済活動と福祉の信頼性を下から支える基盤層をなす、というのがこの概念の骨子である。価値やエートスの次元を主題としてきた従来のモラル・エコノミー論（Tripp 2006; Asutay 2013）に対して、この概念は、価値を作動可能にする制度の層に照準を合わせる。III 節で述べたイスラーム的相互扶助の倫理的基盤は、その最も豊かな歴史的事例の一つである。エシックスを重視する社会福祉論を構築していくための足場を、この概念によって据えたいと筆者は考えている。

この概念がとりわけ試されるのが、人工知能（AI）の時代である。受給資格の判定、配分の優先順位づけ、不正の検知といった福祉統治の中核的な判断にアルゴリズムが関与し始めるとき、そこに新しい形の排除や不平等が生じうるのは、すでに具体的に報告されている（Eubanks 2018）。対面の人間関係にも国家の官僚制にも還元されない、新しい信頼と説明責任の基盤が必要となるのである。デジタル化がすでに提起していた問いは、AI 化によっていっそう切実なものとなる。歴史の中で法解釈によって構築され、いままた再設計の途上にあるイスラーム的相互扶助は、この普遍的な問いを考えるための得がたい参照事例を提供するはずである。あわせて、日本語圏で蓄積されてきた「利他」をめぐる考察との比較対話も、その際の重要な柱となろう。

さらに、概念や知そのものが言語と文化のあいだを移動する際に何が起こるのかという問題系については、2026 年 8 月に、クロヴィス・ベルジェール氏との国際共同編集による英文論集 *Language, Mobility, and Knowledge Production in the New Era* が刊行される（Khashan and Bergère 2026）。筆者は同書に二つの章を執筆した（Khashan 2026b, 2026c）。そのひとつはアラビア語と日本語のあいだの「意味の移動」を論じるもので、イスラーム経済の基本語彙を言語間移動の一事例として取り上げ、日本の学界における「代替的発展経路としてのイスラーム経済」の受容にも言及した。もうひとつの章では、機械翻訳と大規模言語モデルの時代における知識生産の倫理をグローバル・エシックスの観点から検討し、その結びでは「グローバルな知のモラル・インフラストラクチャー（moral infrastructure of global knowledge）」という、本稿と地続きの展望を示した。筆者は、モラル・インフラストラクチャーの視角から AI 時代の福祉ガバナンスを比較研究することを、次の中心的な課題として構想している。最後に、成果の刊行状況に触れておく。本研究の集大成として単著（Khashan 2026a）を公刊し、編

著 (Khashan 2024a) とあわせて英語圏の読者に成果を問うた。さらに、タカーフルをめぐる考察の理念的な核心を日本語の読者に向けて論じ直す和文の学術書を準備している。上述の国際コロキウムやアジア諸国の研究者との協働から生まれた、日本人研究者を含む多国籍の執筆陣による複数の英文編著の刊行に向けても、現在、編集・準備を進めている。イスラーム経済研究は、そのグローバルな性格上、国際連携と分野横断の対話が不可欠の分野である。地球規模の相互依存が倫理の単位そのものの再考を迫っているとするグローバル・エシックスの議論 (Singer 2002) を踏まえるならば、相互扶助の倫理的基盤を問う本研究の試みが、イスラーム圏の理解に資するにとどまらず、AI時代の経済と福祉のあり方を考えるための共通の知的資源となることを期している。

※本報告は、基盤研究 (B) 「アジア・ムスリム諸国の相互扶助の新展開：ポスト新自由主義期のイスラーム経済再構築」 (課題番号：21H03713-23K21811)：研究代表者：ハシャン・アンマール)、および学術変革領域研究 (A) [A01 班公募研究] 「イスラーム法のワファー (契約の誠実履行) の概念と適用：社会・経済の信頼関係から」 (23H03932：研究代表者：ハシャン・アンマール) の研究成果の一部である。

参考文献

- 伊藤亜紗編 (2021) 『「利他」とは何か』 集英社新書。
- 五十嵐大介 (2011) 『中世イスラーム国家の財政と寄進：後期マムルーク朝の研究』 刀水書房。
- 黒木英充・後藤絵美 (編) (2023) 『イスラームからつなぐ1：イスラーム信頼学へのいざない』 東京大学出版会。
- サドル, ムハンマド・バーキルッ = (1993) 『イスラーム経済論』 黒田壽郎訳, 未知谷。
- 長岡慎介 (2011) 『現代イスラーム金融論』 名古屋大学出版会。
- ハシャン・アンマール (2020) 「東南アジアにおけるワクフ制度の再活性化：イスラーム経済と法学からの理論的考察と実証研究」 『立命館アジア・日本研究学術年報』 1号, 62-66頁。
- (2023a) 「イスラーム社会における『言葉』の力：ワファー (契約の誠実履行) から見る「信頼形成」の基盤【前編】」 『イスラーム信頼学ブログ』 2023年10月18日。 <<https://connectivity.aaken.jp/ja/newsletter/1866/>>
- (2023b) 「イスラーム社会における『言葉』の力：ワファー (契約の誠実履行) から見る「信頼形成」の基盤【後編】」 『イスラーム信頼学ブログ』 2023年10月18日。 <<https://connectivity.aaken.jp/ja/newsletter/1868/>>
- (2024) 「東南アジアにおけるイスラーム経済活性化の動向と研究展望：アジア研究者ネットワークの構築を軸として」 『立命館アジア・日本研究学術年報』 5号, 82-87頁。
- 吉田悦章 (2017) 『グローバル・イスラーム金融論』 ナカニシヤ出版。
- 和辻哲郎 (2007) 『倫理学』 全4冊, 岩波文庫 (原著1937-1949年)。
- Adachi, Mari. 2018. Discourses of Institutionalization of Zakat Management System in Contemporary Indonesia: Effect of the Revitalization of Islamic Economics. *International Journal of Zakat* 3(1), 23-35.
- al-Dūrī, ‘Abd al-‘Azīz. 1950. *al-Nuẓum al-Islāmiyya*. Baghdād: Wizārat al-Ma‘ārif al-‘Irāqiyya.
- Ali, Khalifa Mohamed et al., eds. 2019. *Revitalization of Waqf for Socio-Economic Development*, 2 vols. Cham: Palgrave Macmillan.

- Asutay, Mehmet. 2013. Islamic Moral Economy as the Foundation of Islamic Finance. In Valentino Cattelan (ed.), *Islamic Finance in Europe: Towards a Plural Financial System*. Cheltenham: Edward Elgar, 55–68.
- Commission on Human Security. 2003. *Human Security Now*. New York: Commission on Human Security.
- Eubanks, Virginia. 2018. *Automating Inequality: How High-Tech Tools Profile, Police, and Punish the Poor*. New York: St. Martin's Press.
- Hassan, M. Kabir and Mervyn K. Lewis. 2007. *Islamic Finance*. Edward Elgar.
- Ibn Khaldūn, 'Abd al-Raḥmān ibn Muḥammad. 1981/1401. [*al-'Ibar wa-*] *Dīwān al-Mubtada' wa-l-Khabar fī Tārīkh al-'Arab wa-l-Barbar wa-man 'Aṣarahum min Dhawī al-Sha'n al-Akbar*. Ḍabṭ al-matn wa-waḍ' al-ḥawāshī wa-l-fahāris: Khalīl Shaḥḥāda. Murāja'a: Suhayl Zakkār. 1st ed. Bayrūt: Dār al-Fikr.
- Igarashi, Daisuke. 2019. The Waqf-endowment Strategy of a Mamluk Military Man: The Contexts, Motives, and Purposes of the Endowments of Qijmas al-Ishaqi. *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* 82(1), 25–53.
- Kawamura, Ai. 2020. New Dispute Resolution Approach and Models for Islamic Finance. *Arab Law Quarterly* 34(2), 141–166.
- Khashan, Ammar. 2020. Current Trends in Revitalization of Waqf as a Sustainable Islamic Microfinance Instrument: An Overview of the Kuwaiti Vision. APU 18th Asia Pacific Conference (口頭発表).
- . 2022. Ijtihad-based Developments of the Waqf System in Islam and its Re-institutionalization in the Contemporary Context: Historical and Theoretical Reflections. *Kyoto Bulletin of Islamic Area Studies* 15, 93–118.
- , ed. 2024a. *The Development of Islamic Economics for Social Welfare: Reassessing Waqf, Zakāt, and Takāful in Asia*. Ibaraki: Asia-Japan Research Institute, Ritsumeikan University.
- . 2024b. Reconfiguration of Takāful/Islamic Welfare under Modern Economic Conditions: Navigating between Nass-based Zakāt and Ijtihad-based Waqf through Nuzum Perspectives. Fifth International Colloquium on Asian Paths of Civilization and Development: Promoting Post-COVID International Collaboration, at Ritsumeikan University (Online, Osaka Ibaraki Campus), 27 February, 2024 (口頭発表).
- . 2024c. An Etymological Analysis of Aqd, Amana, and Wafa Social Value Bases for Transactions and Mutual Trust in the Islamic Market. International Workshop in Islamic Trust Studies: Envisioning Islamic Socio-Economic Systems: Innovations in Legal and Practical Frameworks, at Ritsumeikan University (Online, Osaka Ibaraki Campus), 13 March, 2024 (口頭発表).
- . 2026a. *Islamic Social Finance and the Architecture of Mutual Responsibility: Zakāt and Waqf in the Digital Governance of Islamic Welfare*. Ibaraki: Asia-Japan Research Institute, Ritsumeikan University.
- . 2026b. Beyond the Ocean of Cultural Differences: Arabic, Japanese, and the Mobility of Meaning. In Ammar Khashan and Clovis Bergère, eds. *Language, Mobility, and Knowledge Production in the New Era*, expanded edition. Ibaraki: Asia-Japan Research Institute, Ritsumeikan University (AJI BOOKS).
- . 2026c. Who Speaks in the Age of Machine Translation? Language, AI, and the Ethics of Knowledge Production. In Ammar Khashan and Clovis Bergère, eds. *Language, Mobility, and Knowledge Production in the New Era*, expanded edition. Ibaraki: Asia-Japan Research Institute, Ritsumeikan University (AJI BOOKS).
- . forthcoming. The Moral Infrastructure of Islamic Economics: Ethical Finance from Ibn Khaldūn to Umer Chapra. In Hassanudin Mohd Thas Thaker, Farhad Taghizadeh-Hesary, Mohamed Asmy Mohd

- Thas Thaker, and Anwar Allah Pitchay (eds.), *Ethical Finance for a Sustainable and Just Transition*. Springer Nature.
- Khashan, Ammar and Clovis Bergère, eds. forthcoming. *Language, Mobility, and Knowledge Production in the New Era*, expanded edition. Ibaraki: Asia-Japan Research Institute, Ritsumeikan University (AJI BOOKS).
- Nagaoka, Shinsuke. 2022. Potential of the Islamic Economy as a Post-capitalist Economic System. *Kyoto Bulletin of Islamic Area Studies* 15, 3–17.
- . 2025. Islamic Finance Confronting Capitalism and Encountering Post-Capitalism. *Kyoto Bulletin of Islamic Area Studies* 18, 16–29.
- Salim, Arskal. 2008. *Shift in Zakat Practice in Indonesia: From Piety to an Islamic Socio-Political-Economic System*. Chiang Mai: Silkworm Books.
- Sen, Amartya. 1999. *Development as Freedom*. New York: Alfred A. Knopf.
- Siddiqi, M. Nejatullah. 2004. *Riba, Bank Interest and the Rationale of its Prohibition*. Jeddah: Islamic Research and Training Institute (IRTI)/The Islamic Development Bank.
- Singer, Peter. 2002. *One World: The Ethics of Globalization*. New Haven: Yale University Press.
- Tripp, Charles. 2006. *Islam and the Moral Economy: The Challenge of Capitalism*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Yasuda, Shin. 2025. “Editor’s Preface” to the Special Feature “Accountability in Islamic Economy: Transforming Religiosity and Religious Experience in Muslim Societies.” *Kyoto Bulletin of Islamic Area Studies* 18, 1–15.